OUMC

大阪大学山岳会 会報

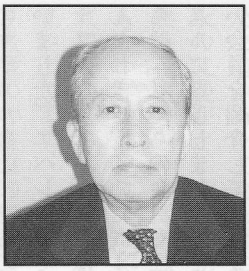
No.2（追悼特別号）

2000年12月

発　行　大阪大学山岳会
〒565－0871 吹田市山田丘２－１
大阪大学工学部建築工学専攻　大野研究室内
ＴＥＬ０６－６８７９－７６３５
ＦＡＸ０６－６８７９－７６３７

徳永篤司会長が死去

本会会長で、会創設者の一人である徳永篤司（とくなが・あつし）氏が九月四日午後七時三分、大阪府吹田市の大阪大学医学部附属病院で亡くなられました。死因は骨盤内腫よう、七十二歳でした。自宅は兵庫県芦屋市奥池南町一六ノ一〇。



徳永氏は大阪市出身。昭和二十二年、旧制浪速高校を経て大阪帝国大学医学部に入学後、浪高山岳部ＯＢとして登山活動を続けるかたわら、二十四年に故・篠田軍治初代会長（元工学部教授）、大島輝夫氏らとともに初の全学組織である大阪大学山岳会を設立され、今日の本会の基礎を築かれました。

三十一年には日本山岳会マナスル第三次遠征隊（初登頂に成功、槇有恒隊長）に隊員兼医師として参加され、本会会員として初めてヒマラヤに足を踏み入れられました。この経験をもとに、ご本人こそ参加されませんでしたが、三十六年から四次にわたる本会のヒマラヤＰ29峰（七、八三五メートル）遠征の推進役を務め、四十五年の初登頂成功に導かれました。

五十九年には、水野祥太郎・第二代会長の死去を受けて、第三代会長に就任、後進の指導に当たってこられました。

葬儀・告別式は九月七日、兵庫県西宮市六湛寺町の楠会館でおこなわれ、本会会員をはじめ、医学部関係者ら約六百人が参列、松田暉・大阪大学医学部第一外科同窓会長（葬儀委員長）、大塚博美・日本山岳会会長、そして、友人代表として本会会員の加藤幹太・滋賀大学学長の三氏が弔辞を述べられました。

（次ページに続く）

山田前山岳部長も

大阪大学名誉教授で、前大阪大学山岳部長、当会名誉会員の山田朝治（やまだ・ともはる）氏が十月五日午前一時十分、脳内出血のため、大阪府高槻市の病院で亡くなられました。七十四歳でした。自宅は高槻市城山町一六ノ一二。

山田氏は大阪市出身。昭和二十三年、大阪大学工学部精密工学科を卒業され、助手、講師、助教授を経て、四十三年に教授に就任。学生部長、工学部長も務められました。

この間、恩師であった故・篠田軍治山岳会長らの要請を受けて、五十四年に山岳部長に就任され、平成二年に退官されるまで、現役部員の指導に当たられるかたわら、白馬山ろくの山の家「栂の木寮」の維持管理面でも多大なご支援をいただきました。退官後は、関西大学工学部教授を務められたあと、同九年三月からは非常勤講師をされていました。

気さくで温厚な人柄は、現役部員として直接、薫陶を受けた若手会員だけでなく、年配の会員からもＯＢ同然に親しまれ、「山田先生、山田先生」と敬愛を集めておられました。

葬儀・告別式は十月七日午後、高槻市古曽部町の高槻セレマホールでおこなわれ、阪大、関大関係者をはじめ、企業関係者ら約六百人が参列しました。（12ページ以後に追悼記事）

弔辞

マナスルの友　安らかに

大塚　博美

マナスル登山を共にした岳友、徳永篤司君をしのんで、謹んで追悼の辞をささげます。

徳さん、あなたの病が重いと、風の便りで聞いて、心を痛めておりましたが、やはり運命には逆らえませんでしたね。いい仲間がまた一人、この世を去って、淋しい限りです。

マナスル登山は、もう四十四年も前のことになりますね。一九五六年二月、槇隊長一行の私たち本隊は神戸から船でカルカッタへ、サンシア号でした。出航の前夜、新婚の君のマンションからの港の夜景の美しさは今でも心に焼きついています。そして、奥さんがボートに乗って船を追い、別れを惜しんだ情景が昨日のように思い出されます。

徳さん、あなたがクライミングドクターとして若手の登攀メンバーに選抜されたのは、戦前の浪高時代から、鹿島槍のカクネ里合宿登山に励み、戦後は鹿島槍北壁を中心とした六十時間のラッシュアタック、積雪期の白馬三合尾根と主尾根の初登攀など、数々の初登攀をなし遂げた山歴と、大阪大学山岳会を発足させたチームリーダーだったからだ、と私は思います。あなたは、そんな山歴の素振りもあまり見せず、ドクターとしての面白い話でいつも話題の中心でした。

徳さん、私は先ごろ、アメリカ山岳会を訪問した折に、広いライブラリーのテーブルにマナスル登山隊の報告書を二冊そろえた役員、職員の歓迎を受けました。君や私、その写真など指さしては一気に話はなごみました。やはり日本を代表する登山記録は八、一五六メートルの初登頂のマナスル登山にあるのだなあと思いました。エベレストではなく、マナスルなんです。彼らはそれをきちんとわきまえていたようでした。彼らは「私たちの会員も三年前にマナスルに登頂しました」と言って、若い会員を紹介してくれました。彼は照れ臭そうに「一九五七年生まれです」と言いました。改めて、マナスル初登頂が歴史的な壮挙として登山史に名を留めていることを認識させられ、感銘を受けました。

あの昭和三十年代の時代背景を思い合わせると感慨無量のものがあります。戦後の混乱、社会不安をくぐり抜け、復興の兆しが見え始めたころではありましたが、未だ暗い世相は拭い去られておりませんでした。マナスル登山の成功が明るいビッグニュースとして報道され、さらに、それが映画「マナスルに立つ」として上映されたことが、いかに国民に希望と夢、生きる勇気を与えたことか、そして日本の国際社会への復帰に際し、日本人としての誇りと自信を取り戻すのに、いかに支えとなったことか。

徳さん、私たちは山が好きで、ヒマラヤに行けるということだけで十分だったよね。自分たちのマナスル登山の成功がそんな大袈裟なことになるとは思ってもいなかった。しかし、五年にわたる登山隊派遣の巨額な経費に理解と強い支援を与えてくれた毎日新聞社をはじめ、政・官・財の総力を挙げてのバックアップを思い返して見ると、いかに多くの人たちの温かい支援を受けていたか、特に、毎日新聞が紙面を通じて呼びかけた登山隊募金に多くの小学生が小遣いを寄せてくれたことは今でも忘れることは出来ません。

徳さん、私たちの世代は、マナスル登山に巡りあえて幸せでしたね。人それぞれ山との出あいがありますが、マナスルと人との出あいがこれほど偉大なこととは、年と共に年輪のようにしっかりと私の身上となっております。天上では、浪高先輩の今西寿雄さんはじめマナスルメンバーの皆さんがあなたを温かく迎えてくれるでしょうから、きっと賑やかになるでしょう。どうか安らかに、ご冥福を祈ります。

（日本山岳会会長）

兄と慕った友　逝く

加藤　幹太

故徳永篤司君のご霊前において、友人を代表して、謹んで弔辞を申し述べさせていただきます。（以下、徳永と呼ばせていただきます）

私が初めて徳永と出会ったのは昭和十五年ですから、ちょうど六十年の付き合いになります。当時すでに大陸における戦争状態があり、急速に世界大戦へと突入してゆく時代でありましたが、われわれは旧制七年制高校である浪高尋常科で楽しい時代を過ごしました。

徳永は十三の自宅から通っていましたが、まことに利発そうな美少年でした。父親は呉服商を営みながら大阪府会議員として活躍され、母親も多くの子女を育て、のち府会議員として賢夫人と言われた方であり、徳永はその血を享けて、実に多くの知識を持ち、企画力と判断力に卓越したものがありました。

私が山岳部に入ったのは尋常科三

年の夏、徳永、家田と共に雫石先生に連れられて後立山連峰へ行った時でした。徳永は一見きゃしゃな体つきに見えましたが、山歩きの強さに驚かされたものです。家田君は早く世を去り、まことに残念でした。

戦時中にも私たちは集まっては山の話をし、乏しい食料を持ち寄っては山へ出かけました。その後、徳永は阪大医学部へ進み、外科を志しました。そこで大島輝夫君と出会い、二人の努力で篠田先生の下で大阪大学山岳会をつくり、後立山を中心とする積雪期の困難な登山活動を始めました。私は一度、京大工学部に在籍しましたが、阪大理学部へ転身しました。その理由は、通学に便利とか、志望する学問ということもありましたが、一番大きい理由は、また徳永と山へ登れるということが潜在意識にひそんでいたようです。

当時、阪大山岳部はまことに多士済々であり、住吉君、尾藤君を始め、のちにヒマラヤで活躍する多くの人がいました。私も大学院にいる間まで、その仲間の一人として楽しく青春を過ごしました。

やがて徳永は、浪高の先輩である今西寿雄さんと共に日本山岳会のマナスル登山隊員に選ばれ、栄光の一翼を担うことになり、阪大山岳会の名を高めて、阪大としてのヒマラヤ遠征を考え始めたのであります。

私は京大へ移りましたので、少しずつ徳永とは疎遠になり、寂しい思いをしていました。一つだけ彼と二人の山行を述べるとすれば、冬の富士山へ大晦日に登ったことです。猛烈な突風の襲う氷の斜面を、風の合間を縫って猛スピードで登ったことは貴重な経験でした。徳永はこの山行をヒマラヤ行きの訓練と考えていたに違いありません。このあと、徳永の父親がオーナーをしておられた熱海花壇という立派な旅館に泊めてもらい、彼の兄に夜の熱海の町へ連れて行ってもらったことを懐かしく思い出します。

後輩の坪井君の事故も、私には忘れがたい苦い思い出ですが、その坪井君も昨年他界され、彼の葬儀の委員長を徳永がつとめました。その折に会ったのが、私が徳永と会った最後になってしまいました。

徳永は、他の人との交際を極めて重視し、古い友人や後輩に対する面倒見と親切さには、ずっと敬服しておりました。七月に病院へ電話した時は、非常に元気な声でした。私が三月に胆石及び胆管結石症で苦しんだことについて病状の説明と注意を懇々としてくれました。自分の病気より気遣ってくれたことに感激しました。自分の病気については「あと一年ぐらいかな」と言っておりましたので、私の見舞いも遅れてしまい、後悔しております。

私は徳永をずっと兄のように思ってきました。世話になりっぱなしで、何かと相談しました。彼の決断力と説得力は時には強引さを伴っていましたが、そのリーダーシップがあればこそ、徳永病院を創設して関西の外科学界に貢献し、また阪大山岳会の名声を高めることができたのではないでしょうか。

私は多忙な管理職を長年務めてきましたし、家も離れているために、最近は徳永と会うことも少なく、来年の私の任期が終われば、徳永夫婦と外国旅行でもしようとひそかに考えていました。これが果たせず残念の極みです。徳永からもらった文章に、奥さんと共に北極海を旅した紀行文があります。一読して実に楽しく羨ましく思いました。今まで苦労

＜徳永氏の年譜＞

昭和２年（1927年）11月15日　大阪市生まれ
22年　大阪帝国大学医学部入学
26年３月　医学部卒業、医学部附属病院へ
27年　医学部第１外科入局
28年８月～31年４月　大手前病院外科
33年11月～37年３月　市立芦屋病院外科医長
37年４月　徳永病院開業
平成元年（89年）４月～10年１月
大阪大学医学部第１外科同窓会幹事長
（この間、日本外科医会副会長、大阪府臨床外科医会会長などを歴任）

山岳会関係

昭和24年６月　大阪大学山岳会を創設
25年１月　厳冬期の白馬岳主稜初登
31年　日本山岳会第３次マナスル遠征隊に隊員兼医師として参加（この年、初登頂に成功）
35年～　４次にわたる大阪大学山岳会Ｐ29遠征隊の事務局長役として登山計画を推進（45年、初登頂に成功）
59年　大阪大学山岳会会長に就任

をかけてきた奥さんへの罪ほろぼしの気持ちが表れていますが、えらい所へ奥さんを連れてゆくもんだという思いがすると同時に、いかにも彼らしいと感心しました。

徳永の追憶は限りなく、哀惜の念は雲のように湧き上がってきます。しかし、人間も七十歳を過ぎれば、多少は禅僧の境地に近づいてくるもので、幽明境を異にすることも住所の違いくらいに考えられると思います。大切なのは、故人がいかに人の心の中に強い印象を残したかということでしょう。

徳永は、実に多くの人、例えば、彼が救った無数の患者の人たち、古い友人や後輩たち、誰よりも奥さんと令嬢に、凛然とした彼の風貌と共に、強い意志の持つすばらしさを残してくれました。全く颯爽とした勇気溢れる人でした。

私は、どんな苦境に立っても笑顔を絶やさなかった徳永を、晴ればれした気持ちで送ることができます。兄と慕う私もいずれ天上でお会いして、この世で果たせなかった思い出話をするつもりです。それまで、しばらくは、おさらばです。

（滋賀大学学長、昭和27年理学部卒）

◇

松田　暉氏の弔辞は、紙数の都合で割愛させていただきました。

さよなら　徳永さん

（以下は、会員から寄せられた追悼文です）

徳永なかりせば……

大島　輝夫

徳永（敬称を略する）は戦後の阪大山岳部の創立者であり、また、マナスル登山隊員であった。カリスマ性のあるリーダーであり、オルガナイザーであった。篠田先生と徳永なかりせば、今日の阪大山岳会もP29もなかったかもしれない。

戦後、まだ食糧の乏しかった時代、各大学山岳部は復員した人々を中心に復活の道を歩み始めていた。浪高山岳部も、OBの佐谷健吉氏が中心となり、現役の徳永、家田、加藤らが細野（今の八方）の丸山与兵衛さん宅を根拠地として活動を始めていた。その当時、ヒマラヤ八千メートル級の登山のために、国内でも積雪期の極地法登山を最優先とした早稲田の関根吉郎氏らと、ラッシュタクティックを採用すべきだと主張する人々との間で論争が行われていた。

昭和二十三年一月四日、すでに阪大に入っていた徳永は、佐谷さんとともに、遠見小屋からカクネ里、鹿島槍北壁の一部を登り、天狗尾根から荒沢に下るラッシュタクティックによる登攀を行った。このあと再び一人で遠見小屋に登ってきて、「阪大に山岳部をつくりませんか」と私に声をかけてきたのが彼との初対面であった。その直後の三月にはもう、与兵衛さん宅を根拠地として、再び二人で遠見尾根に登っていた。これが阪大山岳部の最初の山行と言えるであろう。

正式発足後の最初の冬山合宿は白馬主稜の厳冬期初登を目指した。当初は猿倉小屋をベースとする予定であったが、中京山岳会が同じ計画で先に小屋に入っていた。徳永は両隊が合同で行動する話をまとめ、我々のベースは与兵衛さんの尽力で、その下の水力発電所小屋が使えることになった。一回目のアタックは天候に恵まれずに引き返し、みんなの士気が沈んでいた時、徳永はポケットマネーを出して、部員に細野まで行って牛肉を買ってこさせ、これで一同、元気を取り戻した。このことからも徳永の機を見るに敏な性格がうかがわれる。

マナスル第三次隊の時、徳永は登攀兼医師として隊員に選ばれたが、直前に黄疸になり、自分でも「登攀は無理だろう」と言っていた。しかし、隊がサマの部落民と揉めた時、たまたま現地の子供がひきつけを起こした。徳永は部落民らの見守る中をゆっくりと進み、注射で直ちに治し、揉め事は事なきを得たという。

今年八月五日、阪大病院に見舞った時、徳永は「十分ぐらいにしてくれ」と言い、目をつぶったまま、「頼みたいことが二つある」と切り出した。一つは後任の会長人事のこと、もう一つは対岳館の前に山岳会の記念碑を建ててほしいということだった。その場で二件を引き受けて別れた。碑は何とか年内に建てて写真を見せてやりたいと思ったが、それも叶わぬこととなってしまった。この上は徳永の遺志に添って、阪大山岳会を顕彰するとともに、お世話になった与兵衛さんはじめ、細野の人たちに感謝の意を表す碑を早急に建てたいと念願している。

徳永はじめ、家田、松久、坪井、小沢と、我々と山行を共にしながら先立った方々のご冥福を祈るとともに、阪大山岳会もP29登山に参加した会員を中心に活力を取り戻してほしいと期待している。

（昭和27年理学部卒）

徳さんとの50年

川島　勇

故徳永会長（徳さんと呼ばせていただく）とは、一九五〇年（昭和二十五年）四月、金曜例会で初めてお目にかかってから、ちょうど五十年になる。山行を共にする機会は少なく、写真も一枚しか残っていないが、例会でのご指導のほか、多くのかかわりがあった。

五四年四月、私は北海道赤平市の炭鉱に赴任するため大阪を離れた。何年かたって、旭川の国体に参加された徳さんから、突然、「ハンゴー、持ってきて」という連絡があった。旭川と赤平は地図の上ではすぐそばの二点に見えるが、当時の北海道の交通事情では簡単には行けない。それでも、徳さんの頼みとあらばと、汽車を乗り継いで届けた。

三十年近い赤平勤務の後、東京本社勤務を経て、八三年七月、大阪支店長として関西に戻り、徳さんはじめ山仲間と旧交を温めた。ある時、徳さんから、倉敷で療養中の篠田先生を有志でお見舞いし、その後で懇親会をやるから、宿と名門ゴルフ場を手配してくれ、と言われた。岡山の元特約店に頼んで、倉敷の美観地区にある吉井旅館と倉敷CCをセットした。それから数回、私もこのツアーに参加し、良き思い出になっている。

また、八五年八月、栂池集会に初めて参加した時、徳さんに連れられて、遠見尾根にある「家田の地蔵」にお参りした。故・家田さんは私にとって大小の山行を共にしたリーダーであり、感慨深いものがあった。

九九年八月の白馬集会は阪大山岳会創立五十周年記念集会で、徳さんは、自らが創立にかかわり、大きく育てた会の五十年を淡々と語られた。そして、二〇〇〇年の白馬集会には病のため出席されなかった。

徳さんとの五十年は、とぎれとぎれではあったが、再会の都度、何か心温まるものがあった。また、どこかで、「川島君、そば食いに行こや」と声をかけられるような気がする。

（昭和29年工学部卒）

徳さんを囲んで　一九五一年三月二十日、大町で。後立山逆縦走（失敗）の行動開始前、A、B隊合流。前列左から大久保、徳永、川島。後列左から加藤、坪井、松久、細見

マナスルと薬品と

宍戸　元

医局では徳永先生だし、山岳会では徳永さんで、時には親しみを込めて「徳さん」と呼ぶのが我々年代の先輩の呼び方だった。ある時は人の世話をよくし、ある時は強引に物事を進めるリーダーであった。

徳永先輩が日本山岳会第三次マナスル隊の隊員に選ばれたころが先輩と一番かかわりが深かった時期だった。医療担当であった先輩は十三の自宅を準備の事務所として、医薬品リストの作成と収集が大きな仕事であった。一方は隊員用の医薬品、一方はネパール住民の診療用の医薬品だった。十三の先輩の住居は古い家で、天井は高く薄暗かった。ただ新婚間もない奥さんのたたずまいだけが華やかさを漂わしていた。

当時、感染症の主力薬品だったサルファ剤のドミアン、整腸止しゃ剤のエンテロヴィオホルム、エマフォルムなどが今でも思い出される。これらの薬品が大量に集められた。現地の衛生事情から考えて必須の薬品であり、住民との交流にも役立ったものと思う。もちろん、まだ学生であった私には、その薬品構成の意味など分かるはずはなく、黙々とリスト作成に携わった。

仕事が一段落つくと近郊のドライブに出かけた。先輩の自家用車はオースチン。運転は先輩、助手席に徳永家の運転手、後部座席に私、生駒山麓から枚方方面が通常のルートだった。車内の会話は、運転手の「アブナイ」「ブレーキ」「もっと左」だけだったと言えば、少し大袈裟かもしれないが、道路は現在ほど整備されていなかったものの、渋滞も少なかった。

当時の私には、病院では常識である内服薬、外用薬の区別はおろか、坐薬の意味さえわからなかった。その度に「おまえは医学部か。何にも知らんな」だった。それから四十余年、サルファ剤は第一線を退き、エンテロヴィオホルム、エマフォルムなどキノフォルム剤は視力障害や末梢神経障害を起こす「スモン」の主

犯となり、薬害のはしりとなった。

マナスルという「国家的事業」に末端ながら参加させていただいたことを先輩に感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

（昭和32年医学部卒）

執刀第一号患者

木村　裕一

昭和二十八年初夏、山岳部のルームで剣沢での夏山合宿の準備中、たまたま徳永先輩が顔を見せられた。私は、かねがね慢性の盲腸炎で、時々痛みを感じていたので、軽い気持ちで発症時の措置や投薬について尋ねたところ、即座に「山で発症したら大変だ。合宿はあきらめて、すぐ手術せよ。おれが切ってやる」。

全く心の準備のない私を尻目に、早速、附属病院への入院手続きまでてきぱきとやって下さった。手術は簡単に終わり、十センチほどに伸びきって白濁した虫垂を見せてもらった時、これで時々襲われる痛みと、憂うつな気分から解放される、と感謝感激した。

その年の冬山行は、西穂高の天狗のコルから奥穂高、北穂高までテントを進め、尾藤さんと川島さんがそこからラッシュタクティックで槍ケ岳を往復された、かなり大きな山行であった。ところが、参加されていた東さんが急に腹痛を訴えられ、騒ぎとなった。大島先輩と共に応援に来られていた徳永さんが急性盲腸炎と診断され、東さんは下山された。

その時の徳永さんと私の会話。

「どうだ、切っておいて良かっただろう」「はい」。「少しも痛まないだろう」「はい」。「神経を避けて慎重に切ってやったからな」「ありがとうございます」。本当に手術してもらって良かったと、しみじみ思った。

それから随分の年月がたってからである。「お前は、おれが初めて手術した患者や……」。これには驚き、頭が混乱した。

私が初めて徳永さんにお会いしたのは、まだ高校生のころで、関西学生山岳連盟の集会で、高校をも連盟の傘下に入れ、積雪期登山の指導をするという話を聞いた時である。阪大山岳部へ入った時は、すでに雲の上の人だった。常に自信と威厳を持って先輩の現役の人たちに接しておられた姿しか知らなかったので、大変偉い先輩に手術してもらったと思っていた。しかし、考えてみると、徳永さんは当時まだ二十五歳ぐらい、インターンを終え、やっと医局員になったばかりの新米ドクターで、腕がうずうずしていた時につかまったということであった。

ありがとう　徳永さん

以来、四十数年、勤めた会社が近かったこともあり、徳永病院には公私ともに大変お世話になることとなった。また、昭和三十八年のP29第二次遠征隊にバラサーヴとして参加したが、偵察という性格上、資金もなかなか集まらない貧乏隊の事務局として物心共にサポートしていただいた。そして、執刀第一号患者の盲腸手術の跡は今も六センチ以上に鮮やかに残っており、何げなく触れたり見たりする時、徳永先輩を思い出し、楽しかった青春の日がよみがえるのである。

（昭和31年経済学部卒）

面倒見の良い先輩

大工原　恭

私と同期、あるいはそれ以降の学年で、徳永さんと山に登った経験のある者はあまりいないと思うので、まず、それを記しておきたい。

昭和三十五年八月中旬、故・篠田軍治先生が薬師岳に登られるから、現役はポーターとして参加するように、と徳永さんから話があり、私のほか、同期の田村、広瀬、田井らが徳永さんと同行した。当時は、まだ湖西線はなく、米原回りの夜行の鈍行列車で早朝に富山に着き、完成間近の有峰ダムを経由して折立から入山した。

あとで知ったことだが、この山行は篠田先生のヒマラヤ（第一次P29遠征）への体力テストであった。先生は、空荷とはいえ、快調に登られ、その日のうちに薬師の頂上を往復して太郎小屋に宿泊。次の日は薬師沢を黒部の出合まで降りて、手づかみで岩魚を捕まえたりして遊び、再び太郎小屋に戻って、一匹の岩魚を全員で分けて食べたりした。

この間、徳永さんは篠田先生の体調を気遣われるほかは、常にユーモアあふれる口調で、少し大げさに言えば、しゃべり詰めであった。当時の我々現役にとって、マナスルに行かれた徳永さんは雲の上の存在であったが、この山行をきっかけに親しめる先輩に変わった。

その後、P29遠征が本決まりとなって、徳永さんは準備の総指揮をとられることになり、その下で働く我々現役とのお付き合いもさらに深まった。ただ、本業がお忙しいうえ、

元来せっかち性で、途中の経過をとばして結論だけを言われるため、戸惑うことも多かった。しかし、一大学の山岳会として四回もの遠征隊を出せたことは、篠田先生や諸先輩の力はもとより、やはり、これらの力をうまくまとめて下さった徳永さんのお陰であると思う。

徳永さんは人使いは荒いが、面倒見の良い先輩であった。P29遠征隊の仕事も終わり、卒業した後も、相談事があると、いつでも会って下さり、面倒な物事を即決で処理して下さった。そんなことで、この四十余年間、私事も含めてお世話になる一方であった。

早かった「再発」に驚く

黒田　治朗

医学生のころ、山行に携帯する薬品をもらいに徳永病院を訪ねたことがあります。当時、三十代後半で、颯爽と現れた外科医の姿が今も目に焼き付いています。

その大先輩から二年前に電話をもらったのです。排尿状態が悪いので、泌尿器科の私に診てほしいというものでした。前立腺肥大はなく、尿道の造影が必要でした。この検査は痛いので患者さんから恐れられていますが、じっと我慢されました。尿道狭窄が見つかり、この原因は先輩自ら、昔のアプザイレンによるものと診断されました。ついでに腎尿管の造影もしたところ、全く偶然に尿管の腫瘍が見つかったのです。これは私の手に負えないと、泌尿器科の大先輩のいる大阪府立病院を紹介させてもらいました。手術とその後の経過は順調でした。そして翌年、術後再発予防の抗がん剤治療を勧められているが、君の考えはどうか、という電話をもらいました。副作用が強く、誰もが嫌がる治療です。結果論になりますが、あの時、もっと強く勧めるべきであったと後悔しています。再発がこんなに早く、また、思いもかけぬ部位に出るとは、泌尿器科医の誰もが予想しなかったことです。

今年四月、抗がん剤で全く食べられなくなっておられた辛い時期にお見舞いしましたが、逆に、私の宝塚市立病院退職のことを色々と心配して下さいました。気にしていないようで、細かいことに気配りする心の優しさを垣間見た思いが致します。

病魔から解放され、安らかにお眠り下さい。

（昭和44年医学部卒）

お加減が悪いとは聞いていたが、今年夏の対岳館での集会で、少し良くなられて退院された、との話を聞いた直後の訃報である。お世話になったお礼も出来ず仕舞いで、誠に申し訳ないと思うと同時に、山岳会の歴史の大きな一ページがめくられたような気もしている。ご冥福をお祈りする。

（昭和38年歯学部卒）

最も先輩らしかった人

高木　俊夫

最近、教育基本法の改正が議論されている。昭和一けた生まれ末尾の我々は、昭和二十二年の同法と学校教育法の施行に伴う学制改革の大波に翻弄された。そのため、大学入学まで、上級生とか先輩とかいうものは、形式上はともかく、実質的には存在していなかった。下級生の世話をする余裕もなかったろうし、当時は、特に下克上の傾向が強かったから、上級生を尊敬する思想も極めて希薄であった。

大学に入っても、その状況に変化はなかった。唯一の例外が、山岳部における徳永篤司先輩であった。当時、学生部の建物の屋上にあった木造の部室に、あの眼光鋭い人が現れると、皆が大いに緊張したものであった。彼の影響下にあった山岳部では、何人かの先輩らしい人に出会うことができた。上記のような「先輩欠乏症候群」に罹患していた私にとって、これらの人たちから受けた恩恵は大きかった。

一昨年六月の山岳会総会に出席した。在部時に活躍しておられた三枝礼子さんがネパール語辞典刊行の話をされるというので、まことに久し振りに出席した。講演後の懇談の席で、徳永さんが向こうから私の方に寄って来られた。実は、徳永さんから直接話しかけられたことはそれまでなかった。それで、当方は、年がいもなく、大いに緊張した。

眼光は依然として鋭かったが、温和な態度で接していただいたので、安堵した。話の内容は、伝統的な外科を志望する学生が減ってきたとの嘆きであった。山岳部も似たような状況にあると聞いている。徳永さんにとっては、外科と山岳部、二重の悩みであったろう。その時はお元気そうで、まだまだ医学界でも登山界でも活躍を続けられるものと、お見受けした。

それだけに、突然の訃報は驚きであった。私の生涯で最も先輩らしかった人として、徳永さんは忘れることができない存在である。ご冥福を祈るとともに、山岳部が苦しい状況

に負けずに、存続、発展されることを祈りたい。

（昭和31年理学部卒）

冥途へのお便り

細見　一仁

徳永先生、僕に死期が来たら、笑いながら、そちらへ伺うと思いますよ。先生と会えるんですからね、迷惑かな。こわい兄貴だったけれど、大好きでした。

初めて連れて行かれた山は多紀アルプス、小沢君が一緒でした。野猿と猪の王国を行くのは気分がよくなかったです。阪大山岳会が誕生して早々でしたね。次が厳冬の白馬主稜のサポートでした。たった一人で、ガスの猿倉台地を白馬尻まで林を縫って迎えに行った時の心細かったこと。そこへ真っ先に下りてこられた先生の影を見た時は本当にホッとしました。あの時の家田さんはもういないし、半世紀が過ぎましたね。

第一回目の後立山逆縦走の時は、松久先生と三人で、冷の村落から国境稜線まで連日、荷上げをしましたね。一回目の帰路で、沢を間違えて氷雪の滝を下りたのを憶えていますか。先生が後ろから「そんなに走るな　下は氷だぞ！」と叫ばれましたが、僕は雪崩が怖くて、飛ぶように走ってしまいました。下りきった時は、先生の方が先だったような気もするのですが、振り返ると、上の方に松久先生が豆粒のように見えました。その先生も今は亡き人です。

北岳バットレス第二尾根を登った時は、ご迷惑をかけました。重い山靴の入った僕のザックを担いで、あの庇のようなオーバーハングを登りきって下さいました。庇の上と下では声は届かず姿は見えずで、何の役にも立たず、すみませんでした。あの時は命懸けでした。あれが先生の阪大山岳会としての最後の山行ではなかったかと思うのですが。

ではまた、蓮の台（うてな）で。

（昭和32年歯学部卒）

「責任感」語る連絡文

高田　邦雄

私の手元に、Eメールとはがきが各一通ある＝**写真**。どちらも、生前の徳永さんから届いたものだ。

まず七月十六日に来たEメール。「七月十一日一応小康を得て退院します」の書き出しで、五十年誌についての指示が並んでいる。その少し前から、「Eメール送ったけど、着いてへんか」との電話はあったが、受け取るのは初めて。恐らく、娘さんの協力を得て、やっと送信に成功されたと思われる。早速、返事を出したが、返信はなかった。私が徳永さんから受け取った、最初にして最後のメールだ。

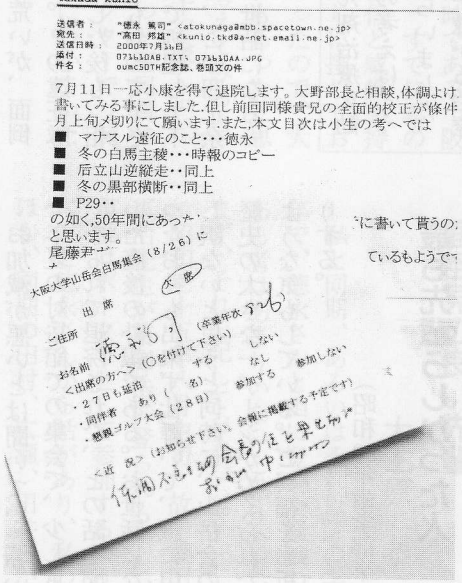
はがきは、八月の白馬集会の出欠で、「七月二十一日東淀川局」の消印がある。近況欄には、自筆と思われる書き込みがあり、「体調不良のため会長の任を果せないで」までは読み取れるが、そのあとは不明瞭。多分、「おわび申し上げます」と書いてあると推測するばかりだ。

徳永さんは、体調を崩した昨年あたりから、「もう会長はだれかに譲りたい」と漏らされていた。

そして、私は、今年の冬に阪大病院へ見舞いに行った時から、今回の事態を薄々予想はしていたが、こんなに早いとは思わなかった。

二通のメールとはがきは、病魔と闘いながらも、山岳会のことを気にかけていた徳永さんの病床を想像して余りあり、改めて責任感の強い人だったんだ、との思いを新たにしている。長い間の会のお世話、ありがとうございました。

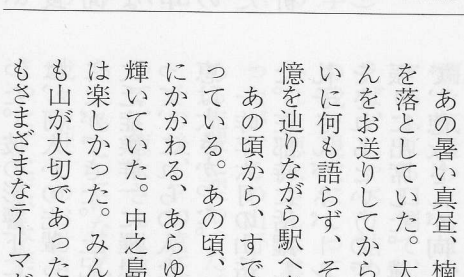
（昭和39年経済学部卒）


takada kunio

送信者：　"徳永 篤司" <atokunaga@mbb.spacetown.ne.jp>
宛先：　"高田 邦雄" <kunio.tkd@a-net.email.ne.jp>
送信日時：　2000年7月16日
添付：　071610AB.TXT; 071610AA.JPG
件名：　oumc50TH記念誌、巻頭文の件

7月11日一応小康を得て退院します。大野部長と相談,体調よけ書いてみる事にしました.但し前回同様貴兄の全面的校正が條件月上旬メ切りにて願います.また,本文目次は小生の考へでは
■　マナスル遠征のこと・・・徳永
■　冬の白馬主稜・・・時報のコピー
■　后立山逆縦走・・同上
■　冬の黒部横断・・同上
■　P29・・

1/1


の如く,50年間にあった
と思います。
尾藤君
大阪大学山岳会白馬集会（8/26）に
出席
ご住所
お名前　徳永篤司（卒業年次　50）
<出席の方へ>（○を付けて下さい）
・27日も延泊　する　しない
・同伴者　あり（　名）　参加する　なし　参加しない
・懇親ゴルフ大会（28日）
<近況>（お知らせ下さい。会報に掲載する予定です）
に書いて貰うの
ているもようで

徳永さんを偲ぶ

岡田　博司

あの暑い真昼、楠の木が濃い樹影を落としていた。大勢の中で徳永さんをお送りしてから、妻と二人、互いに何も語らず、それぞれ胸中の記憶を辿りながら駅へ歩いた。

あの頃から、すでに四十有余年たっている。あの頃、山と阪大山岳部にかかわる、あらゆることが眩しく輝いていた。中之島のルームの生活は楽しかった。みんな若く、何よりも山が大切であった。部にも自分にもさまざまなテーマがあった。

さよなら 徳永さん

登山におけるラディカリズム、ラッシュアタックとポーラーメソード、国内登山とヒマラヤ遠征、栄光と挫折、希望と失意、団体と個、登山の意味もしくは無意味、そして人生の意味。徳永さんの語られた言葉、綴られた言葉の数々は定かには思い出せないが、その全体は強く、そして温かく、優しかった。

徳永さんと、すでに逝った坪井さん、村瀬君、佐藤君、そこにまた山田先生の訃報を聞く。春になったら、あの遠見尾根の一角に登り、諸兄のありし日を偲び、霊を慰めなければならないと思う。

（昭和33年法学部卒）

懐の大きな人だった

三澤　日出夫

本当に大切な人を失いました。それも、思いがけなく急に。

確か四年前、「マナスル登頂四十周年記念でネパールへ行くねん。トレッキングもしてくるわ」と、おっしゃったので、「なぜ四十周年ですか？」と尋ねると、「五十周年言うとったら、人が（死亡して）おらんようになってまう。エベレストでも、四十周年やっとんねん」と、おっしゃっていました。

死去の報に接して、このことを真っ先に思い出しました。その後、「日本人の遭難騒ぎで、大変やったわ。トレッキングどころやなかったわ。せやけど、カトマンズも、えらい変わりようやった」と、感慨深げに話されていました。今年秋のP29記念のヒマラヤツアーの参加予定者にお名前がありませんでしたが、お体の調子が悪いことなど、つゆ思いもしませんでした。

徳永さんには、度重ねて大変お世話になりました。けれども、「世話をしてやった」とは、全く人に感じさせない懐の大きな方でした。「○○したろか？」「ぜひお願いします」「よっしゃ」の繰り返しを続けた次第です。

あんなにも熱い心で見守り、育てていただいた山岳会の後輩として、今後の活動を続けていくことが徳永先輩へのご恩返しと思っています。ご冥福をお祈り致します。

（昭和38年工学部卒）

徳永院長の思い出

山田　靖則

「徳永会長」と書かずに「徳永院長」と書いたのには理由がある。ネパール旅行が原因と見られるC型肝炎の治療でお世話になり、「院長」としての徳永さんを、もっとも身近に感じていたからである。

一九九三年、大阪市立大学の土木の中井教授（当時）が「山田、ネパールに行こう。川重がカルナリプロジェクトで斜張橋を架けている。現場監督がおれの教え子や」と何度も誘いをかけてきて、私と同期の市大山岳部OBの小林君を交えた三人で十日間、ネパールに滞在した。帰国後三カ月半たった八月の終わり、技術者仲間とゴルフに出かけた二、三日後、非常に体がだるくなった。暑いさなかのゴルフの疲れだろうと思ったが、どうも、そればかりではないようなので、徳永病院で検査をしてもらった。

まず、A型肝炎マーカーに引っかかり、C型肝炎も見事に引っかかってしまった。徳永院長はいつもの口調で「C型肝炎は三十年経ったら肝硬変になり、最後は肝臓がんで死ぬで。まあ、三十年経ったら八十歳近くになるから、何で死んだかはどうでもようなるけどな」と言われ、「月一回は検査に来い」ということになった。その後、三十年は二十年に訂正され、GOT、GPTとも、たまに増える程度なので、検査は二カ月に一回と減ってきた。

そのうち、「Mac（パソコン）を買ったので、保存してきた山の資料を整理したい。手伝え」ということで、ほとんど使ったことのないMacで画像ファイルの整理方法や保存機器の手配、取り付けまでさせられるようになった。

そうこうするうちに休診が多くなり、看護婦に聞くと、入院しているとのこと。この時は無事退院され、少々顔がやつれてはいたが、元気に復帰された。

「実は、腎臓がおかしくて、手術したんや。手術する時は、上手な病院を調べとかんと、殺されるで」という調子であったが、今年に入ってから、また休診が多くなった。「腰が痛くて起きられない。そのうち、出て来る」ということであったが、結局、再度、診察室に座られることはなかった。

この間、娘が北京大に留学する時には抗生物質をいただいたり、家内の大腸がん検診に便宜をはかっていただいたりと、家族ともども、お世話になったが、いつも、いやな顔一つせずに対応してくださったのには頭の下がる思いである。

（昭和46年工学部卒）

海外遠征で議論

上月　登喜男

学生のころ、徳永先生といえば大先輩で、山行ごとにOBに郵送していた計画書などをガリ版刷りからコピー印刷に変えるにあたり、徳永病院のコピー機を借用したり、救急用の薬品類一式を頂戴に上がったりといった、ありがたいけれど、やや遠い存在であった。そんな先生と、もう少しかかわり合うようになったのは、大学院進学が決まった同期の仲間とともに海外遠征の相談を持ちかけてからである。

当初、先生は、我々が提案した遠征計画には反対であった。海外に行くのはよいが、処女峰を狙うことにだけこだわらず、かといってバリエーションルートや難攻不落の壁を攀じるのでもなく、「登るならP29、あるいはエベレストを安全・確実に落としてこい。そのためには高所登山の技術を磨く必要があるだろう。（当時、高山研究所がおこなっていた）パミール国際キャンプに参加するのはどうだ」などと、逆に勧められたのを記憶している。大学山岳部の目指すべきは、パイオニアワークではなく、登山技術の練磨と安全性の確立にあると、おっしゃりたかったのであろう。

結局は、「初登頂」の誘惑に勝てず、サンゲマルマール遠征を計画・実行したわけだが、反対されたのは最初に相談を持ちかけた時のみで、計画が決まってからは物心両面からサポートしていただいた。お陰で無事故で大量登頂を果たすことができ、P29やエベレストには見劣りするものの、徳永先生が望まれていた「安全登山の実証」の一部は達せられたのではないかと思っている。

個人的には、その後、インド旅行中に病に倒れ、一年間にわたり徳永病院のお世話になった。完治には至らなかったものの、日常生活には支障ない程度に回復し、現在、家族五人での生活を営んでいる。いつか、ご挨拶に伺おうと思っていたが、果たせずに心残りである。

（昭和58年理学部卒）

三代の付き合いを謝して

丸山　庄司

十年ほど前になるでしょうか。阪大山岳部OB会の集まりが我が家であった時、徳永さんから「人間ドックに来なさい」と言われました。早速、その年の初秋、芦屋・奥池の徳永邸にお世話になり、総合健診をしてもらいました。「脳は尾藤に話してあるから」と、厚生年金病院へ行きました。翌日は、徳永さんの運転で、六甲山の人工スキー場や神戸港、中華街などを見物し、二人でゆっくりと昼食を楽しみました。多忙の身なのにと恐縮しました。以来、毎年、健康チェックを続けています。

終戦後間もない昭和二十三年一月の鹿島槍北壁への挑戦は、我が家がベースだったので、少年だった私も当時のことは鮮明に覚えています。祖母は早朝、炊きたてのご飯を仏前に供え、登山の無事を祈るのが常でした。身支度を整えた徳永さん、佐谷健吉さんらメンバーの無事を祈って、そのご飯を数粒ずつ食べてもらえた。ところが、わが「雲の上の人」徳永さんとか、同年代（当時二十歳代）の隊員は、まるで若造扱いである。帰りのキャラバンでは、吊り橋を渡るはずの所を徳永さんだけが見逃してしまい、「ずーっと一人で向こう岸を歩いてやがんの。しょうがないやつだ」ということだったとか。

その「しょうがないやつ」が、たまに東京へいらっしゃると、私はやはり、かしこまってお辞儀をするばかりだったが、徳永さんは日本山岳会の長老たちに私のことを何かと取りなして下さっていたらしい。何カ月も後になって気づいたけれど、つい、お礼を申し上げそびれてしまったということが何回かあった。今、ひたすら、お名残惜しい思いでいっぱいである。

（昭和30年薬学部卒）

名残惜しい「雲の上の人」

三枝　礼子

植物採集を口実に六甲山周辺を歩いていただけの私が阪大山岳部に入部を許されたころ、徳永さんはすでに口うるさいOBの筆頭（だったと思う）でいらした。合宿の報告会などで、現役リーダーの「です」「ます」調の報告を不満げに言葉少なく聞いていらした様子は、先輩・後輩の掟を知らない新入部員の目にも存在感十分であった。折々の山行や合宿のたびに、徳永さんはじめ諸先輩の山歴やエピソードを繰り返し聞かされた。ご一緒の山行の機会はついになかったけれど、それだけに一層、徳永さんは「雲の上の人」という感じだった。

一九五五年、卒業とともに私は東京に移り、就職した。その年に日本山岳会第三次マナスル登山隊の準備が行われたので、医薬品類の整理などをお手伝いしたことがご縁となって隊員の方々にお会いする機会が増

いながら、「気をつけてのう、無事でけえってくるだぜ」と送り出していました。

記録を見ると、北壁登攀は六十時間不眠不休の行動であった、とあります。我が家に帰ってからは、ただ眠りこけておられました。二日目の夕方に起きてこられたので、登山の様子を聞くと、「佐谷さんの脚が長いので、ステップを合わせるのが大変だった」と、あの独特の笑顔で話してくれたのが印象に残っています。

数々の実績を上げた徳永さんがマナスル遠征隊員に選ばれたのは当然のことでした。マナスルから帰国された翌年二月、スキーの友三人と十三のお宅に泊めていただきました。神鍋の国体に出場した帰りを誘ってくださったのです。スキーの世界しか知らない私たちはマナスルの話に興奮して聞き入ったものでした。

我が家の浪高から阪大へと長いお付き合いの中で、私も夏山合宿へ連れて行ってもらったこともありました。それがきっかけで山歩きが好きになり、北アルプス一帯の山岳案内人の資格を取得してガイドをしたり、山岳救助隊員の活動に携わったりすることができました。

徳永さんが初めて白馬に来られたのは昭和十五年ですから、以来六十年間、父与兵衛から息子の徹也まで三代にわたるお付き合いでした。それにしても、あまりにも早過ぎました。思い出が走馬灯のようによみがえってきて、いまだに信じられない気持ちでいっぱいです。今はただ、徳永さんの遺徳を偲びつつ、心からご冥福をお祈りし、お別れの言葉といたします。

（名誉会員、対岳館館主）

徳永さんへ ひとこと

徳永氏と私とは、年齢も在学年次もほとんど同じながら、かなり異なった生き方をしたようだ。山登りだけについても、氏は後立の東面からマナスルへと、いわば表道を颯爽と歩かれた。それに対し、私は、低山趣味でもハイキングでもないが、さりとて高峻険難の域には入らない、ひと気のない山ばかりを好んで歩いて、君が山へ行かなくなってからも、そして逝った今もなお、それを続けている。「山登りは心の旅路」。以って二人の山行の対比や如何？

（工27・久保　三朗）

◇

坪井さんが亡くなったばかりで、ショックです。徳永会長とは山には同行しなかったのですが、雪の岩場は陽が昇る前に登りきるなどと言うラッシュタクティック登山の提唱者として、あまりにも凄い馬力に仰天していました。鹿島槍北壁の厳冬期登攀の快挙は、いつまでも登山史に残ることでしょう。心からご冥福を祈ります。

（工29・近　璋三）

◇

不まじめな会員だったせいで、ご一緒した山行はありませんが、現役時代に、確か、道場での練習中に夜遅く来られて、火をかこんで雑談を交わしたことを覚えています。一番印象深いのは最後にお会いした昨年夏の細野の集会で、山岳会創立当時の思い出を語られたことです。それによって徳永さんが現役時代からリーダーシップを持っておられたことがはっきりと理解できました。そして、徳永さんの当会への思いと影響力の大きさを知ったわけです。長年にわたって山岳会とわれわれを育ててくださって本当にありがとうございました。

（工31・鷺沢　忍）

◇

我々山岳会の大きな心の支えを失って本当に残念です。私はご一緒に登ったことがないので、亡夫・圭之助の言葉を借りて一言。

「徳永先生は自分の夢を次々と実現して、多方面に輝かしい功績を残された。あの一見ぶっきらぼうな言葉の裏にある、思いやりのある温かい気持ちが後になってじわじわと感じられる」。そんなお人柄につくづく頭が下がりました。主人は、こんなすばらしい大先輩と、五十周年白馬集会で聞いた、あの良き時代の山行を共にできたことを非常に誇りに思っていたことと思います。今ごろはきっと、あの世で、また一緒に山に登っていることでしょう。心よりご冥福をお祈り致します。

（薬33・坪井　和子）

◇

私が現役のころは、えらく怖い存在でした。合宿に持っていく薬をもらいに伺っても、「何しに来てん。帰れ」と一蹴されたこともありました。しかし、私も年をとっていくにつれて距離がちぢまり、次第に親近感を覚えるようになりました。娘の就職を依頼に行った時には、親身になってお世話いただきました。本当は、少し照れ屋で、やさしかった徳永さん、やすらかに。

（工42・石浜　高明）

山田先生を悼む

多忙な中で、よくぞ

山岳部長　大野　義照

山田先生から電話をいただいたのは、亡くなる一カ月前の九月六日であった。徳永会長の訃報をご自宅にファクスでお伝えしたことへの返事で、「今、入院しているので、告別式には行けないが、よろしく伝えてくれ」。聞くと、「腰痛で、椎間板ヘルニヤの手術をした。経過がよく、もうすぐ退院や。五月に山岳会の皆さんとゴルフをした時は腰が痛く、やっとのことで回った。その後も痛みが続くので手術をした」とのことであった。その後、また電話をいただいた。「退院した。すっかり痛みが取れた。これでまた、皆さんとゴルフもできる」。その直後の訃報であった。ご自宅の庭木の剪定をされていての事故であった。誠に、残念きわまりない。先生には、これから先、まだまだ山岳会とお付き合いをしていただきたかったのに。

先生には、前部長の恩地先生が香川医大付属病院へ移られた一九七九年から、工学部を定年退官された九〇年三月まで十一年間、山岳部長として現役の面倒を見ていただいた。山岳部OBではなかったが、故・篠田軍治先生の門下生であり、若い時から、よくスキーに信州へ出かけられ、山に対する理解もあったし、面倒見が大変よいとのことで、大学全体の委員会で懇意となられた恩地先生から後任の部長をお願いされたとのことであった。

実は、部長になられる前にも、お世話になっている。七〇年、P29登頂後に遭難した渡部洋君の葬儀が、当時、中之島にあった大学本部会館であった際は、学生部長としてご配慮をいただいた。その時の山岳部長が恩地先生であった。

八四年には、工学部長として多忙を極めておられる時に、カラコルム・サンゲマルマール峰遠征隊を出していただいた。工学部キャンパス内に準備室を設けていただき、登頂成功の知らせが入った時、部長室でテレビの取材を受けられていたことが思い出される。また、その前後に現役部員の海外登山を三度もご支援いただくなど、現役の活発な活動を応援していただいた。

阪大退官後も、山岳会の夏の例会、年次晩餐会、総会と、いつも参加していただいた。「篠軍から、何よりも山岳部の行事を最優先にするよう言われ、それを守っている。大野君、君も見習うように」。私が多忙を理由に会合を欠席すると、お小言をいただくこともあった。行事に参加された先生は、故・徳永会長や同年輩の会員の方々と愉快に談笑されるだけでなく、若いOBや現役にも声をかけ、激励していただいた。

先生、長い間、山岳部と山岳会に目をかけていただき、ありがとうございました。

（昭和42年卒、工学部教授）

OB顔負けの熱意

田島　汎

昭和五十四年春、当時、山岳部長をしていただいていた恩地裕教授が香川医大に転出されることになり、後任をということになった。ところが、その時点で、OBで阪大の教職についている人はいない。その時、故篠田会長から提案があった。「精密工学の教授で山田朝治君というのがいる。この人に頼みたい」。我々一同、「ハア」。「山田君はOBではないが、山が好きなんだ」「ハア」。「浪高の出身で、徳永君の一年上なんだ。やはり現役の部長をやってもらうとなると、徳永君に物を言えるようでないといけないと思うんだが」

何と言われても、山田先生なる人を知らないのだから、「ハア」としか答えようがない。こんな経緯があって、新部長を山田先生にお願いすることになったのである。

初対面は、その年の山岳会総会。篠田先生の紹介に、さすがに神妙な顔をしておられたが、その後、お付き合いが深まるにつれて、ざっくばらんで愉快な性格が分かってきた。現役とのこまめな接触の一方、山岳会の会合にもいつも出席され、たちまち古いOBと変わらなくなってしまったのも人徳であろう。

そのころ、先生がよく話された篠田先生との逸話がある。それは先生がまだ助手ぐらいのある年、夏山に登ることになり、教授の篠田先生に「親戚の法事がある」と言って休暇を取り、槍・穂高方面に出かけた。山を下りて徳沢園まで来たとき、何と、そこに篠田教授がいるではないか。「シマッタ」と思ったが、もう遅い。どこかへ飛ばされるのを覚悟したという。しかし、篠田先生は「山」ということになると、すべてOKという方であったので、一切おとがめなしだったという。両先生の面目躍如たる逸話である。

現役の面倒をよくみていただいたことはOB顔負けだった。院生の飯田君が剣で遭難した時は、第一報が先生に入ったのは当然としても、以降、先生の所を対策本部として、現地との連絡、救援隊の派遣などをてきぱきと処理され、OBの出る幕もなかった。もう一つ、先生がことのほか力を入れられたのは部員数の増加であった。このころの入部者は毎年一人か、ひどいときはゼロという年もあり、何とか新人を勧誘したいと心を砕いておられた。時代の流れには抗しがたく、現在もこの傾向は続いているが、現大野部長以下、我々も微力を尽くして取り組み、先生の遺志に添わねばなるまい。

先生はゴルフがお好きで、ちょいちょい、ご一緒した。山岳会の夏の例会後の恒例のゴルフ、篠田先生のお見舞いに行ったついで?の岡山でのゴルフなど、思い出は尽きない。先生のゴルフの特徴は何と言っても豪快なティーショットではなかろうか。お年の割に飛距離も出て、また、それを醍醐味と感じておられたようで、思いっきりスイングしておられた。それがたたったのか、腰を痛められ、「痛い、痛い」と言いながらも振り回しておられたのが目に浮かぶ。そんなわけで八月の信州にはお見えにならず、腰の具合が良くなられたら、またお供できるかなと思っていた中での突然の訃報に仰天した次第である。ただ、ご冥福をお祈りするのみである。山田先生、どうぞ安らかにお眠り下さい。

（昭和28年経済学部卒）

研究の師でもあった

大工原　恭

昭和五十四年春、山岳部長をしておられた故・恩地裕先生が香川医科大学へ転任されることになり、「後任の山岳部長を山田先生にお願いした」との話が、故・篠田先生からあった。当時、私は、ご多忙の恩地先生を補佐する山岳部長代理をしていたが、同時期に私も鹿児島大学への転任が決まっていたため、山岳部の書類などを持って山田先生の教授室にお伺いした。

先生は、それまで山岳部とは無関係の方であったが、篠田先生や恩地先生のお口添えもあったため就任をご快諾下さり、現状報告と事務引継ぎを聞いて下さったあと、「根は山好きなんだ」と話された。以前は、篠田先生と山に行かれた（連れて行かれた?）こともあったそうである。そんな話の後、「地方大学に行くと刺激が少ないので、どうしても研究がおろそかになる。科研費（文部省の科学研究費補助金）をもらえるような良い仕事をするように」と話されたのが強く記憶に残った。

その後の先生の山岳部へのご功績は改めて記すまでもないが、学生部長の経験を生かして山岳部の部室を共同装備保管室として確保して下さった手腕は特筆すべきであろう。国有地である大学の敷地に、たとえプレハブといえども建物を建てるのはきわめて難しいことなのである。また、先生は山岳会の会合にも努めて出席して下さった。お酒がお好きだったこともあって、その後は先生の巣にもよく連れて行っていただいた。そのうちのキタの「美之」は今では山岳会の巣にもなっている。

ある夏の日、その美之での話の中から、栂池の山岳会集会に先生の車で行くことになり、大野君と一緒に乗せていただいた。車好きの先生は結局、大阪から栂池まで一人で運転され、昼には奥様手作りのお弁当まで頂いた。今となってはこれも懐かしい思い出の一つである。先生がお亡くなりになる一週間前も、私は偶然、美之で飲んでいて、体調も良くなられたようだから、そのうちにまた先生と一杯やれるかなどと話をしていた。その美之から、先生の突然の訃報を受けた。誠に残念としか言いようがなかった。

歯学部が吹田のキャンパスに移転した後は、特別講義などの際に工学部の先生のお部屋にお邪魔して、山岳部の現状などのお話を伺った。そんな話の後、あるいは飲み屋などでも、先生は必ず「仕事をしているか。科研費はもらえているか」と、ハッパをかけて下さった。お陰様で、私も鹿児島に移って二十余年の間に、母校の教室に負けない業績を上げられたと自負している。そんな意味で、先生は、私にとって、山登りよりも研究の上での師であった。山田先生、ありがとうございました。ご冥福をお祈りします。

（昭和38年歯学部卒）

「よっしゃ、分かった」

松尾　敬志

徳永会長に続き、山田先生の訃報に接し、あまりに唐突で、しばらく声も出ませんでした。手元に一葉の写真があります。昔、栂の木寮で撮った記念写真で、篠田軍治先生を囲んで徳永会長、山田先生がにこやかに笑っておられます。まだ若く生意気だった私は、これら大先輩の前で物おじすることもなく、「親しく」というより「馴れ馴れしく」お話しさせていただきました。それが先輩方の寛容さであったことに気づいたの

は、少し年を取ってからでした。

山田先生は柔道で鳴らした方でしたが、篠田先生のたっての願いで山岳部長を引き受けられたと聞いております。当時、私は監督をしており、部員ともども本当にお世話になりました。「寝技が得意」と自負しておられましたが、金谷君（当時のリーダー）を始めとする部員の就職など、部活動以外でもお世話になった方々も多かろうと思います。

当時、先生は工学部長で、山村総長のブレーンとして重きを置かれておられました。私は歯学部の一顧だにされない大学院生でしたが、堂々と工学部長室に出入りし、馴れ馴れしくお話しできることを内心得意にしておりました。

折しも、山岳会ではサンゲマルマール峰に遠征することとなり、その準備に若手OB、現役が日夜励んでおりました。私も監督兼隊長として学位論文もそっちのけでしたが、渉外では苦労を強いられていました。山田先生は決してご自分からは「あれこれしてやる」とは言われませんでしたが、途方に暮れ、先生のお力におすがりしにいくと、「待ってました」とばかりに手を打って下さいました。

遠征準備のための物を置く場所がなく、大学当局と折衝しても埒があかず、ほとほと弱り果てて相談にあがった時も、「よっしゃ、分かった」と言われ、翌日には工学部の広い部屋を借り受けることができました。恐らく先生は事情を察知されており、私が来るのを今か今かと待っておられたのではと推測しております。教員の端くれとなった今、参考にさせていただいております。

先生が退官され、私も徳島へ赴任してからは、お顔を合わす機会もめっきり減りましたが、先生が「松尾君なあ、私立大学は研究機関とちゃうで」と寂しそうに言われたのが心に残っております。先生は篠田先生の物まねが得意で、お酒を飲むと、よくやっておられました。私は今でもこれを先生の声音で思い返すことができますが、その時のお顔が浮かんできて、涙を禁じ得ません。

人はやがて死を迎え、早晩、私にもお鉢が回ってくるのですが、徳永会長、山田先生と、流れ星のように相次いで逝ってしまわれると、よりどころのない寂しさに襲われます。ただただ、ご冥福をお祈りするばかりです。

（昭和55年歯学部卒）

理想的な部長

金谷　明

山田先生には十余年間、山岳部長として現役のご指導をいただき、今も感謝の気持ちでいっぱいです。先生は旧制浪高から阪大に進まれた関係から、学内に豊富な人脈をお持ちで、故・篠田先生や山岳会の先輩とも交友があり、我々現役部員にとっては理想的な部長でした。

私は、先生が部長に就任された当時のチーフリーダーを務めることになったため、部の活動への不安や期待、また登山に対する考え方などについて、頻繁に先生の所へお邪魔して助言していただいたものです。そして、常に部員の安全を気遣って下さり、無事下山したとの報告を受けた時のやさしく明るい表情が今も思い出されます。また、今はなくなった、お初天神の居酒屋街へよく連れて行って下さり、有意義な人生訓を拝聴したものです。

突然の訃報を知って、がく然としました。葬儀に参列している間中、何のご恩返しも出来ず、悔やんでも悔やみきれないと思いました。どうか、お許し下さい。寛大な先生のことですから、今後とも山岳部の安全と発展を見守っていただけるような気がいたします。

さようなら山田先生、どうか安らかにお眠り下さい。

（昭和55年工学部卒）

山田先生へ ひとこと

いつも山岳部のことを心配していただいた山田先生、ありがとうございました。就任直後に現役全員を誘って飲みに連れて行って下さいました。学生にとって教授は雲の上の人だったのですが、先生は部員一人ひとりの学業とクラブ活動の両立に心を砕かれ、出来の悪い部員の単位のことまで心配していただきました。また部員数をいつも気にされ、親身になって、ご指導いただきました。先生のご尽力もあって、一時は毎年六、七名の新人が入部する盛大なクラブとなりました。

昭和五十七年三月の私の結婚式でのスピーチも山岳部のことが中心でした。修士二年の時に監督をしていた私は修士論文、現役の監督、そして結婚準備と忙しかったのですが、「卒業後は会社と家庭だけの毎日で楽になるから、山岳部の世話を忘れずにお願いする」とのことでした。

先生、私たちはいつまでも忘れません。そして、これ以上、先生にご心配をかけないように、自分たちで山岳部の伝統を守り、その発展に力を合わせていきたいと思います。本当にありがとうございました。

（基礎工53・明神　知）

◇

会報「OUMC」に掲載されたお写真で、久々に元気なお姿を拝見し、山岳部長に就任された当時、現役のリーダー層として、同期の金谷、広田ともども大変お世話になったことを懐かしく思い起こしました。当時のお礼とごあいさつも十分にできぬまま、突然の訃報に接し、言葉もありません。ただただ、ご冥福をお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。

（工55・岡部　友三朗）

「与兵衛さん」を偲ぶ
恒例の白馬集会

恒例の夏の「白馬集会」は八月二十六日から三日間、長野県白馬村八方の「ホテル対岳館」で開かれ、会員・家族計十七人が参加しました。参加者は昨年の創立五十周年記念集会にこそ及びませんでしたが、いつもながらの和やかな雰囲気で、一年ぶりの再会に話題が弾みました。

初日は、夕食会のあと、対岳館を創業された故・丸山与兵衛氏を記念して別棟に新設された「与兵衛倶楽部」二階に会場を移して二次会。現館主の庄司氏、弟の定利氏も交えて大いに盛り上がりました。初参加の堺谷弘氏（理28）が自作の寝袋兼用ツエルトザックを紹介される一幕もありました。

二日目の自由行動では、手近な八方尾根、白馬大雪渓のほか、遠見尾根、蓮華温泉にまで足を伸ばすグループもありました。最終日の懇親ゴルフ大会は十二人が参加して穂高カントリー倶楽部で開かれ、木村裕一氏が優勝されました。

出席者は次のみなさん。

（卒業年次順）

田島　汎（経28）、堺谷　弘（理28）、住吉仙也（医29）、川島　勇、近　璋三、二木節夫（以上工29）、山本光二（法29）、木村裕一（経31）、宍戸　元（医32）、坪井和子（薬33）、野田憲一郎（経35）、山本信樹（工35）、前沢祐一（工37）、大工原　恭（歯38）、高田邦雄（経39）、牧野大輔（理40）

白馬村に50周年記念碑
募金にご協力を

当会の創立五十周年を記念して、会ゆかりの地である長野県白馬村八方に記念碑を建立することにし、会員から寄金を募る計画が、このほど開いた世話人会（拡大理事会）で決まりました。

白馬三山を望む白馬村細野地区（現・八方）は、会創立後初の記念すべき山行となった昭和二十五年一月の白馬岳主稜登攀（厳冬期初登）をはじめ、数々の後立山登山の基地となり、会員を育ててくれた思い出の地です。なかでも、名ガイドの一人、丸山与兵衛氏のおこした「対岳館」を利用された会員は多きを数えることでしょう。そこで、会の五十周年を顕彰するとともに、併せて、与兵衛氏をはじめ、お世話になった細野地区の皆さんに感謝の意を表すモニュメントをつくるものです。

この計画は故徳永会長の発案によるもので、対岳館の敷地内に設置することで現館主の丸山庄司氏の内諾も得ています。碑の形状や碑文については古参会員を中心に検討中で、来年夏完成をめどに計画を進めています。

建立に要する費用は百万円程度と見込まれ、主として会員の寄金でまかなう計画です。募金要綱は同封した別紙の通りで、会員諸氏のご協力をお願いする次第です。

会員の近況

（今夏の白馬集会の出欠はがきから抜粋しました。卒業年次順）

遠藤　常忠（工13）平成九年六月、河原暐君（工12）と対岳館で落ち合って、栂池のミズバショウを見て、八方尾根にも行ってきました。今は足腰がすっかり弱くなって、ステッキが離せません。

大久保勝巳（医23）昨年いっぱいで小豆島・福田での僻地医療から引き揚げてきました。ゆっくりするつもりでしたが、知人から頼まれて、六月から大阪で特養、身体障害者の施設で働いております。

久保　三朗（工27）チロル、東山（とうせん）、湯殿山、月山、立山-黒部など、いずれもスキーで。今夏はトムラウシと十勝岳に行きました。

堺谷　弘（理28）一昨年は、中国・北京東方の山岳地帯の万里の長城行30日に参加しました。本年七月、テントなしで、雨、雪の中で露営できる寝袋の第一号が完成しました。防衛庁、登山者を対象に売り込みを図っています。

東　雍（医30）（財）阪大微研会に在籍し、ワクチン事業に

携わっています。

三枝　礼子（薬30）老化は、確実に、順調に進行中です。やりかけの仕事の方も、これと同程度には進めておかなければと考えているところです。

樋下　重彦（工33）六月に四十二年間の会社生活を退きました。これからは自然に親しんでいきたいと思っています。

兼清　喜雄（工35）平成十一年十月に会社は退職しましたが、引き続き、物流システムインテグレーションの仕事を引き受けており、多忙です。

野田憲一郎（経35）六月でリタイア。当面、無職です。HAT-Jで山の環境問題に取り組んだり、夏は穂高、秋はP29ベースキャンプ、間に甲武信や朝日岳と、計画だけは多忙です。

村井　忠雄（工36）まとめて休みが取れないため山行ができず、残念です。脚のふくらはぎがやせこけてきました。現役が少ないのが心配ですね。

五百蔵弘典（理37）のんびりするつもりで引き受けた技術コンサル集団の運営委員長と阪大非常勤講師の仕事が思ったより忙しく、悩んでいます。

田村　俊秀（医38）盆休みに赤道の向こう側へスキューバダイビングに行きます。海賊とサメの群れで、山より海の方がヤバいようです。

横尾秀次郎（工39）菅平の東の四阿（あずま）山、天城の万二郎岳などを時々、歩いています。日ごろは一万歩を超えるようにしています。

大川　和秋（工39）大学は今、谷底へ転落しようとしているのか、谷底への良いルートファインディングができるのかの分かれ道に立っていると思います。良いルートファインディングをして新たな道を開拓できればと頑張っています。

吉川　信也（理40）元気に、忙しく働いています。

播本　裕晃（法40）山登りは、ごぶさた。仕事で福島に行くついでに会津の山に行っています。ひなびていて良いですよ。

辻　信男（工42）昨年十一月、くも膜下出血で二カ月入院しました。その後、主に自宅で療養しております。

黒田　治朗（医44）八月末で勤務先が変わりました。宝塚市民病院より川西市の協立病院に移り、第二の人生を歩みます。

岡田　謙治（法44）三月末で、三十一年間勤めた会社を退職しました。同居している母の介護のためです。家をあけることが難しい状況ですので、今後はSOHOでの自営を計画しています。オンラインソフトのプログラマーでもありますので、このあたりをネタの起業を進行中です。

井上　太一（理48）五月に宮之浦岳に妻と、六月に光岳に一人で登り、これで日本百名山のうち九十一峰目。百名山は来年夏ごろ、やっと達成かというところです。

上松　一雄（工50）子供二人が大学、一人は高校となり、すっかり年を取りました。いまだにガスタービンの開発をやっていますが、なかなか売れるものができず、困っています。

松浦　寿彦（工50）七月から東京へ転勤しました。関空（株）勤務は約二年間の短い間でしたが、大先輩の方々と懇親を深めることができ、楽しい関西勤務でした。

後藤　正教（法54）ちょっぴり忙しい部署に異動となったため、趣味の竹工芸もお休みとなりました。相も変わらず家庭菜園で雑草と格闘の週末といったところです。

今村　義弘（工59）横浜の自宅から川崎の勤務先まで片道十五キロを自転車で通っております。いい運動になります。

大西　啓之（人62）結婚してすぐから海外駐在している間に、山とはすっかり疎遠に。娘も大きくなったので、山歩きぐらいから再開できればよいのですが。

大倉　徹雄（工・H2）先日、黒部の赤木沢に行きました。秘境という感じはなかったが、明るく、快適な沢でした。

編集後記

本会報は原則として年一回発行ですが、徳永会長、山田前山岳部長の予期せぬ訃報に伴って特別号を発刊しました。それにしても、たくさんの会員の皆様から追悼文をお寄せいただき、編集者としては文字通り、うれしい悲鳴でした。厚くお礼を申し上げます。なかでも、比較的若い会員諸氏から、心温まる原稿をいただいたのには感激しました。これも、ひとえに両先輩のご人徳の反映と受け止めました。次号は予定通り、来春発行と覚悟しておりますので、皆様のご寄稿をお待ちします。また、徳永会長のご遺志でもある懸案の「50年誌」も引き続き準備を進めますので、ご協力のほどをお願いいたします。

（会報担当・高田邦雄）